

子どもの頃の空想の友達の存在が成人後の個人差に与える影響について

1210507 橋本なつき

高知工科大学 経済・マネジメント学群

序論

子どもたちが何もない空中に向かって楽しそうに話かけていたり、ぬいぐるみと本当の友達のようにお喋りをしている姿を目にしたことはあるだろうか。子どもたちはただ独り言を言っているだけではなく、相手の話を聞き、相槌をうち、こちらには見えない何者かとやりとりを行っているように見える。おそらくこの子どもたちは靈感があるわけでもなく、ましてや妄言を言っている様子でもない。彼らは、彼らだけに存在している友達と楽しく遊んでいるように思われる。そういった存在を、心理学では「空想の友達 (Imaginary Companion, IC)」と呼ぶ。20世紀の初頭から子どもを対象にした研究でしばしば取り上げられてきており、空想の友達は成長過程で消失するのが一般的であると考えられているが、子どもに限らず成人の中にも一定数所有しているものがあることも示されている(麻生, 1996)。

まず、空想の友達について森口(2014)は「名前を持ち、数ヶ月間継続して、ある種のリアリティを伴って子どもが相互作用する目に見えない存在」である、と Svendsen(1934)を引用して定義している。ただ突発的に独り言を言ったりするのではなく、一定期間同じ存在の友達とやりとりをして、互いに影響しあっているものが空想の友達なのである。他人には見ることも感じることもできないが、その友達を持つ子どもにとってはとても現実感を持った存在で、声を聞くことも、話をすることも、時には触ることもできるらしい。

近年の研究では、空想の友達は私たちの目には見えない存在(Invisible Friends, IF)と、ぬいぐるみや人形に人格を付与したモノ(Personified Object, PO)の2種類に分類できると定義される(森口, 2014)。PO については、ただ持ち歩いているだけではなく、そのモノに対してヒトらしい特徴を付与していたり、友達として扱っていることが空想の友達としての定義である(Singer & Singer, 1990)。

IF と PO の違いについては、IF は現実の子どもと同様に対等な関係を持ちやすいのに対して、PO は子どもとの間に上下関係ができやすいことが挙げられる (Gleason, Sebanc, & Hartup, 2000)。また、Yamaguchi and Moriguchi (2020) は、子どもたちがステッカーを取る機会を与えられた時、一人の時や大人が周りにい

る時よりも、PO がそばにいる状況下で多くステッカーを取り、利己的に行動することを示した。さらに、Piazza, Bering, & Ingram (2011) は IF の存在下では子どもが不正行為をする可能性が低いことを示すなど、IF と PO が子どもの道徳的行動に影響を与える可能性も示唆されている。このように IF・PO には類似性とともに関連点もあり、先行研究では研究者によって PO を空想の友達に含めるか否かについて意見が分かれているが、本研究では PO も空想の友達に含め、検討する。

空想の友達を持つ子どもの特徴としては、持たない子どもよりも想像上の相互作用をする能力が高く(Tahiroglu, Mannerling, and Taylo, 2011)、児童期には想像活動や創作活動に好んで従事する傾向がある(富田・高尾, 2014)。また、言語能力の違いもしばしば言及されており、実験者から話を聞いた後に人形にその話を語りなおすこと、そして過去にあった出来事を実験者に語ることを求められた Trionif & Reese (2009) の実験では、空想の友達を持つ子どもの方がナラティブの質が高いことが示された。また、空想の友達を持つ子どもは関係代名詞のような複雑な文法を使うことも示されている(Bouldin, Bavin, & Pratt, 2002)。

また、空想の友達を持つ子どもは社会的認知能力に優れている点も注目を集めている。誤信念課題などによって測定される、心の理論(他者の行動からその背後にある心的状態を推測し、その次の行動を予測するための能力)では、空想の友達を持つ子どもの方が成績が良く、また誤信念課題以外の心の理論課題や感情理解にも優れることが示されている(Davis, Meins, & Fernyhough, 2011 ; Giménez-Dasí, Pons, & Bender, 2014)。Moriguchi & Shinohara (2012) は、空想の友達を持つ子どもは現実の他者だけでなく、目に見えない他者や無生物の対象にも心理学的特性や知覚的特性を帰属させることを示した。森口(2014)では、過剰な社会的認知能力が目に見えない他者の検出につながっていることを示唆し、このような傾向の強い子どもが空想の友達を持つようになる可能性があるとする。

では、空想の友達を所有し上述したような特徴を持った子どもが、成長し大人になった後はどのような特徴を持っているのだろうか

か。空想の友達の研究は子ども(幼児期から児童期)を対象としたものが一般的で、成人を対象としたものは少なく、また過去に空想の友達を所有したことによる影響を検討した研究は見つからなかった。そのため、本研究では子どもの頃の空想の友達の存在が成人後の個人差に与える影響を検討する。

研究1

1. 目的

研究1では、大学生を対象にしたアンケート調査から日本における空想の友達の認知率や過去・現在における空想の友達の所有率の把握及び、空想の友達の有無での青年期における社会性への影響を検討する。

社会性について本研究ではコミュニケーション能力に焦点を当てた。森口(2014)では、近年では幼児期及び児童期(学童期)においては空想の友達の有無でのパーソナリティや気質の違いはほとんどないと述べている。かつては、内気な子どもや社会性の低い子どもが空想の友達を持ちやすいと考えられていた。しかし Taylor, Sachet, Maring, & Mannering (2013)で、内気さ・注意の集中・外向性などの気質の側面が空想の友達の有無との関連を検討した結果では、空想の友達を持たない子どもよりも、空想の友達を持つ子どもの方が内気さは低いことが示され、それ以外では違いがないことが示されている。しかし、そういった違いのなさは幼児期・学童期を対象にしたために見られた結果であった可能性がある。幼児期・学童期とは、集団や社会のルール、自他の尊重の意識や他者への思いやりなどを涵養している時期であり、対人へのコミュニケーションの仕方を学んでいる途中である。そのため幼児期・学童期には大きな差は現れなかったが、その後の中学・高校の学生生活を通して自らの個性や適性を知り、社会の一員としての自覚を芽生えさせながら成長していく中で、徐々に対人的コミュニケーション能力に差が生じる可能性があると考えられる。

したがって、本研究では過去に空想の友達を持っていた者は、空想の友達を持っていなかった者よりもコミュニケーション能力が高いと予測し、調査を行なった。

2. 方法

2.1 調査概要

高知工科大学内の社会経済実験室を使用し、大学生103名(男:57, 女:45 (性別不明:1))に対し質問紙を配布しアンケート

調査を行なった。この調査は数日にわたって実施された。被験者はそれぞれ被験者番号で識別された後個別のブースに移動し、実験者がアンケートを配布したため匿名性は保たれていた。

2.2 質問紙

この質問紙では、町田(2009)のコミュニケーション尺度を使用して、全 22 項目を4件法にて回答させた。このコミュニケーション尺度は、積極的な他者との関わりや、相手を受け入れる力、適切な表現で自分の意見を伝えるかなどの、コミュニケーション能力の行動側面に焦点を当てたものである。

そして、本研究独自に空想の友達の有無についての質問項目を作成し、実施した(詳細は付録参照)。まず、被験者の空想の友達についての認識を統一化するため、「空想の友達とは、実際に存在しない空想上の友達のことであり、ぬいぐるみなどの実在する対象に人格を付与するものと、実在が存在しない目に見えない存在の二種類が存在する。空想の友達には名前・はっきりとしたパーソナリティ・声・姿がある。空想の友達を持つ人は、その友達が現実の友達ではないことは理解している。」と空想の友達の定義を示した。その後「あなたは幼い頃、「空想の友達」がいた経験はありますか?」に対し「はい・いいえ」で回答させ、その後の指示でルートを分岐し、記述項目を含む複数の質問に回答させた。この質問項目では、空想の友達の特徴(性別・年齢・性格)や空想の友達の発現時の自身の状況、空想の友達とのエピソード(記述)について質問した。

また、子どもの空想の友達について養育者が不安や恐怖を感じたり、精神病の兆候だと感じる場合も多くあり(Taylor & Mannering, 2006)、そうしたことも影響して青年期以降になると空想の友達を持つ本人が自身の空想の友達について周りに話したがる傾向がある。そのため、空想の友達について質問されることに嫌悪感を感じる可能性を考慮し、「自分が空想の友達を持つ(持っていた)ことについて、他人に話すことにためらいを感じますか?(感じていましたか?)」「今回のように研究上の目的であるにしても、空想の友達について答えることにためらいを感じたり、嫌な気分になりますか?」を「はい・いいえ」で回答させた。

3. 結果

全てのデータは、HAD(清水,2016)を用いて分析を行なった。

3.1 空想の友達

過去または現在の空想の友達の有無について尋ねたところ、

表 1 の結果が得られた。空想の友達を持っていたと回答した者は 103 人中 23 人と全体の 22%で、その中で現在も所有している者は 13 人と、過去に空想の友達を持っていたと回答した者の半数以上という結果になった。

表1. 空想の友達の有無

	空想の友達なし		空想の友達あり		合計	
	小計		IF	PO		
	79	79	11	10(+1)	21(+1)	102
男性		35	3	9	12	47
女性		48	8	1	9	57

*POに性別「どちらでもない」1名
*IF・PO両方所有が1名

空想の友達の内訳としては、IF(目には見えない存在)が 11 人、PO(ぬいぐるみや人形に人格を付与したモノ)が 11 人という結果になり、IF・PO の両方を所有していたという者も1名いた。

今回のアンケート調査では、エピソードを含めて空想の友達の特徴についても回答させた。その特徴は概ね以下の通りである(全回答については付録参照)。

空想の友達の年齢・性格については IF・PO の違いでの共通点などは見られなかったが、「優しい・穏やか」といった回答が多く、所有者にとってプラスの存在であると推測できる回答が多かった。空想の友達の性別については「わからない」という回答が10人、異性の空想の友達を持っていたのが6人、同性の空想の友達を持っていたのが4人であった。また、複数の PO を持っていたとする1名は、男女それぞれの空想の友達がいたと回答した。空想の友達の性別についても IF・PO での違いはなかった。空想の友達が出現する心理的状态には一貫性はなかったが、「楽しい時・寂しい時」と同程度に「いつもそばにいた」という回答も多く、出てきて欲しい時に来てくれるような都合の良い存在ではなく、そばにいたことが日常で、所有者にとって家族のような存在であった可能性が高い。しかし、空想の友達が出現する実際のタイミングは「一人でのいる時」が 23 人中 18 人(約 78%)と高く、両親が不在の時や学校で一人になった時など、無意識のうちでも一人でのいるのに寂しさを感じている時に現れてくれる、心の拠り所のような存在であった可能性がある。

「犬のぬいぐるみ」が 7 歳ぐらいの穏やかな女の子の空想の友達だったと回答した被験者(女・18 歳)はその空想の友達は楽しい・嬉しい感情で自身が一人の時に現れ「旅行などにも連れて行った。正の感情の時に現れたので、喜びを共有できているような気がした。」とエピソードを回答した。

「あなたは空想の友達について知っていましたか」という質問の

回答は、空想の友達はいないと回答した 80 人のうち、未回答者3人を除いた 77 人の中で 37 人(44.2%)が「はい」と回答した。

3.2 コミュニケーションスキルについて

町田(2009)のコミュニケーション尺度の 22 項目について因子分析(最尤法、プロマックス回転)を行った。その結果 3 因子が検出された(因子分析表は付録参照)。信頼性係数 α はそれぞれ因子 1=.87、因子 2=.86 因子 3=.82 で、先行研究を参考にそれぞれに「相手指向性」「外向性」「表出」と名付け、分析に用いた。

本研究では過去に空想の友達を所有していた方が、空想の友達を所有していなかった者よりもコミュニケーション能力が高いと仮説をたてた。従属変数を「コミュニケーションスキル」、独立変数を「空想の友達の有無」で 2 要因分散分析を行った。結果、空想の有無での主効果は見られなかった ($F(1, 101) = 0.33, ns.$) (図 1)。コミュニケーションスキル3因子間の違いについての主効果は有意差があり ($F(2, 202) = 60.52, p < .001$)、交互作用効果は見られなかった ($F(2, 202) = 0.56, ns.$) (図2)。そのため、仮説は指示されなかった。

図1:コミュニケーションスキルと空想の友達の有無 分散分析

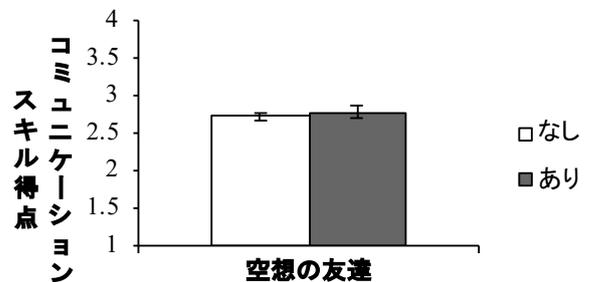
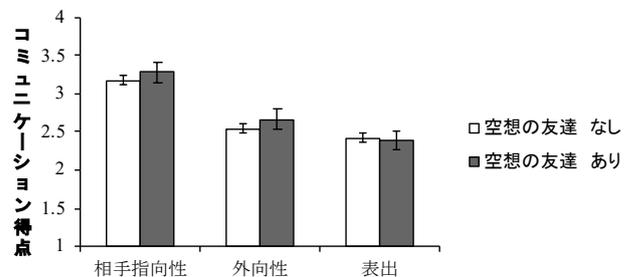


図2:コミュニケーションスキルと空想の友達の有無 交互作用



4. 考察と今後の展望

本研究では、大学生を対象にしたアンケート調査から、空想の

友達の現在を含む所有率や認知度、空想の友達を所有していたことによる現在のコミュニケーション力への影響を検討した。

空想の友達の所有率22%は、先行研究の麻生 (1991)の 17.2%と近い結果であり、先行研究と概ね同様な結果となった。

空想の友達の種類別の割合としては、今研究では IF・PO 同数であった。子どもたちの研究では、西洋と日本の子どもたちでは所有する空想の友達の種類の割合に違いがあることが示されており、西洋では、空想の友達を持つ子供の約半分が IF を所有している (Taylor, 1999) が、Moriguchi & Shinohara (2012)は、日本の子どもたちは IF よりも PO を持つ傾向の方が高いと述べる。今回の結果は西洋の結果に近くなったが、これについては総合考察で議論する。日本の子どもを対象にした研究と、大学生を対象にした本研究との空想の友達の種類の違いについては、今後被験者の数を増やすなどし、検討を重ねる必要がある。

また、自分が空想の友達を持つことを他人に話すことにより、ためらいを感じるかどうかについては、23 人中 13 人がためらいを感じると回答した。その中でも 7 人は研究の目的であってもためらいを感じたり、嫌な気分になると回答したため、空想の友達についての話題は自身のパーソナルな部分に触れる場合もあり、特に成人にアンケート等で調査を行う場合は必ず匿名性の保たれる環境で行うことが適切であることが示された。

空想の友達の有無とコミュニケーション能力の関係については、仮説は支持されなかった。今回は大学生を対象に、対人とのコミュニケーションに絞って行なった結果であるため、空想の友達を所有していたことが成人後の社会性に影響はないとは言いきれない。今後は学生ではなく社会人として周囲と関わりを持っている成人も対象にし、社会性をコミュニケーション力に限定することなく検討する必要があると考えられる。

これらの点については研究2で検討する。

研究2

1. 目的

研究2では、被験者の対象を大学生から成人以上の社会人に広げ、より一般的なデータでの日本における空想の友達の認知率や過去・現在における空想の友達の所有率の把握を目的とする。また空想の友達の有無での成人における社会性の影響の再検討や個人のパーソナリティ、対人関係における特徴・情報処

理などの考え方を検討し、過去に空想の友達を所有していたことが現在にどう影響をしているのかを探る。

子どもを対象にした研究では空想の友達を持っているか否かでパーソナリティや気質の違いはないことが示されているが (Motoshima, Shinohara, Todo & Moriguchi, 2014)、空想の友達を所有していたことによる成人後のパーソナリティの違いについて議論された文献は見当たらなかったため、本研究で検討した。

Yamaguchi & Moriguchi (2020) では、PO を持つ子どもたちが利己主義を示す傾向があると示されており、IF は子どもたちの利己的な行動を抑制する効果があることもわかっている (Piazza et al, 2011)。その傾向は成人後も継続し、個人の利他性に現れているのだろうか。本研究2では PO を持っていた人が利他性は低いと仮説を立て、利他行動尺度も質問紙に加え検討する。

また、研究2では認知的完結欲求についても質問項目に加え検討する。認知的完結欲求とは、問題に対して確固たる答を求め、曖昧さを嫌う欲求と定義される (Kruglanski & Webster, 1996)。人の情報処理プロセスとは、知識形成の前の段階と、知識形成後の段階の二つに分けてとらえることができ、認知的完結欲求とは確固たる答を得ようとする欲求と、一度確固たる答が獲得されるとそれを持続しようとする欲求の両方を包括した概念だと言える。鈴木(2010)では、決断性が高い人は他者に対して不安になることが少なく、行動的に見ても他者に積極的に関わっていく傾向があることが示されており、他者との積極的な関わりから素早く認知的完結を獲得していると考えられる。空想の友達を持っていた経験があるというのは、空想の友達を持っていない人よりも幼い頃から他者との関わりが多く、自分の意見を考えるときも空想の友達という他人と相談していたと捉えることができる。したがって、空想の友達を持っていた人は他人との関わりの中で認知的完結を達成しようとすると考えられるため、認知的完結欲求の決断性が高いと仮説を立て、検討を行う。

2. 方法

2.1 調査概要

2020年9月15日時点でランサーズに登録済の人を対象に、Google Form を使ってアンケート調査を行った。合計で 410 人 (男 227 人:女 182 人:不明1人)から回答を得た。平均年齢は 41.2 歳だった。被験者には謝礼として 100 円を支払った。

2.1 質問紙

本研究では、①日本語版 Ten Item Personality Inventory(TIP I-J)(小塩・阿部・カトローニ, 2012)、②社会的スキル尺度(鈴木, 2010)、③利他行動尺度(小田・大・丹羽・五百部・清成・武田・平石, 2013) ④認知的完結欲求尺度(鈴木・桜井, 2003)、を用いた。

空想の友達の質問項目については、研究1で使用した質問項目を Google Form 用に再度調整し用いた。

・日本語版 Ten Item Personality Inventory(TIPI-J)(小塩・阿部・カトローニ, 2012): 外向性、協調性、勤勉性、神経症傾向、開放性の5つの因子を各2項目(合計 10 項目)で測定し、「全く違うと思う」「おおそ違うと思う」「少し違うと思う」「どちらでもない」「少しそう思う」「まあまあそう思う」「強くそう思う」の7件法で回答させた。空想の友達の有無での基本的なパーソナリティの違いについて検討する。

・社会的スキル尺度(鈴木, 2010): 菊池(1998)によって作成された KiSS-18 に、主張性に関する質問項目を追加した鈴木(2010)の 22 項目を、「いつもそうでない(1 点)」から「いつもそうだ(5 点)」までの 5 段階評価で回答させた。

研究1で使用した町田(2009) の尺度も対人関係を円滑にするスキルを測るものであったが、研究2で使用する鈴木(2010) の社会的スキル尺度は、コミュニケーション力だけでなく「仕事をするとき、何をどうやったらよいか決められる」といった質問からの仕事力や、「あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できる」といった質問からの自己解決力なども測定する。そのため、より社会人としての対人関係に重要となる社会的スキルを測定でき、また、非学生の社会人を含む今回のサンプルにより適していると考ええる。

・利他行動尺度(小田・大・丹羽ら, 2013) : 「家族の誰かが調子が悪そうとき、手伝ってあげる」「道でつまずいたりして転んだ他人を助け起こす」など、過去にどのくらいの頻度で利他行動を行ったかを得点化して利他性を測る。利他行動の対象者から「家族」「友人・知人」「他人」の3因子に分かれる。合計 21 項目を「したことがない」「一度だけある」「数回ある」「しばしばある」「非常によくある」の5件法で回答させた。

・認知的完結欲求尺度(鈴木・桜井, 2003) : 「決断するのにいつも苦勞する」「規則正しい生活が自分の性にはあっているとと思う」「何が起こるか分からないような新しい状況に飛び込んでいくことは、おもしろいと思う」などの項目から、認知的完結欲求の高さを得点化し測定する。この尺度は、決断性・秩序に対する選好・予測可能性に対する選好の3因子に分かれ、合計20項目を「非常

にあてはまる」「あてはまる」「ややあてはまる」「ややあてはまらない」「あてはまらない」「全くあてはまらない」の 6 件法で回答させた。

3.結果

全てのデータは、HAD(清水,2016)を用いて分析を行なった。

3.1 空想の友達

過去または現在の空想の友達の有無について尋ねたところ、表 2 のような結果が得られた。空想の友達がいた経験があると回答した者は 410 人中 126 人と全体の 30.7%で、その 126 人中 29 人(23%)が今でも空想の友達が自身の中に存在していると回答した。

表2. 空想の友達の有無

	空想の友達なし		空想の友達あり		小計	合計
		小計	IF	PO		
	284	284	80	46	126	410
男性	177	177	31	19	50	227
女性	107	107	49	26	75	182

*POに性別「どちらでもない」1名

空想の友達の内訳は 126 人中 80 人(63.5%)が IF(目に見えない存在)で 46 人(36.5%)が PO(ぬいぐるみや人形に人格を付与したモノ)であった。

「その友達(空想の友達)が存在したのはいつ頃ですか?」という質問の回答は自由記述欄にしたため、被験者ごとに回答内容が異なった。「10歳」という、どの時点かの回答もあったが、「5~12歳頃」という期間での回答もあったため、量的な分析には用いないこととした。当該年齢時に空想の友達を持っていたと判断できる記述を元に、それぞれ何歳の時に空想の友達を所有していた人数が最も多かったのかを算出した。結果、空想の友達を持っていた年齢は、IF を持っていた子どもは 5~10 歳が多く、10 歳の時に存在したという人が 35 人と最も多かった。一方 PO は 5~8 歳が多く、5 歳の時に存在したという人が 26 人と最も多かった。この結果は、IF は小学校に入学しても3年程は存在し続けたものが多いということになる。8~10 歳程の年齢になると、出来事の記憶はある程度明確になる頃であるが、小学校入学以前に存在していた PO の存在は幼児期健忘により忘れてしまっている可能性が高い。そのため、本研究2のように PO よりも IF の所有率が多いという結果に繋がっていると考えられる。

研究2でも研究1と同様に、エピソードを含めて空想の友達の特徴についても回答させた。以下に一部を抜粋する(全回答については付録参照)。

空想の友達の特徴については、IF・PO 共に「明るい」や「優しい」という回答が多かった。エピソードには「悲しい時に大丈夫だよと声をかけてくれた」「一人で何かをしていて寂しさを感じた時、一緒に話をしながら作業をしてくれたり、一人でするには勇気がいる時に背中を押してくれる感じがした」といったものがあった。この結果からも、多くの場合空想の友達は所有者にとってプラスの存在だったと推測できる。

どのような気持ちの時に現れたかについては IF には「寂しい時・悲しい時」が多く、ついで「楽しい時」が多かったが、PO については「寂しい時」について、「いつもそばにいた」という回答が多かった。これは、PO は物理的な物体のため自らが常に持ち歩いており、いつもそばにいたという回答に繋がった可能性がある。また、どのような状況の時に現れたかについては IF・PO ともに「一人である時」が多かった。

また、自分が空想の友達を持つことを他人に話すことのために感じるかどうかについては、空想の友達所有者 126 人中 85 人(67.5%)が「はい」と回答した。研究の目的であってもためらいを感じたり、嫌な気分になると回答したのは空想の友達所有者 126 人中 21 人(16.7%)だった。

「空想の友達について知っていましたか」という質問の回答は、空想の友達はいないと回答した 284 人中 114 人(40.1%)が空想の友達について知っていたと回答した。

3.2 パーソナリティーについて

日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J)(小塩・阿部・カトローニ, 2012) について、5つの因子を各2項目(合計 10 項目)で測定するため、先行研究を参考に 5 因子の各 2 項目で相関を算出した(表 3)。結果、どの 2 項目にも相関が見られたため、このデータを分析に用いた。

表3：パーソナリティー相関分析

	Q1:外向性1	Q2:協調性1	Q3:勤勉性1	Q4:神経症傾向1	Q5:開放性1
Q6:外向性2	-.549**	-.122*	-.093*	.232**	-.116*
Q7:協調性2	.277**	-.341**	.310**	-.109*	.226**
Q8:勤勉性2	-.055	.192**	-.465**	.325**	.020
Q9:神経症傾向2	.208**	-.353**	.286**	-.519**	.179**
Q10:開放性2	-.289**	.052	-.261**	.244**	-.389**

** p < .01, * p < .05, + p < .10

各 5 因子の 2 項目での平均値と空想の友達の有無で混合要因分散分析を行ったところ、空想の友達の有無の主効果は有意であった ($F(1, 408) = 8.26, p = .004$)(図3)。また、パーソナリ

ティの主効果も有意であった ($F(4, 1632) = 63.23, p = .001$) が、交互作用では有意差が見られなかった ($F(4, 1632) = 0.85, ns.$)(図4)。パーソナリティー全体としては空想の友達を持つの方が、得点が高いという結果になったが、5つの因子個々としての差は見られないという結果になった。この結果についての解釈は困難である。

図3：パーソナリティーと空想の友達の有無の分散分析

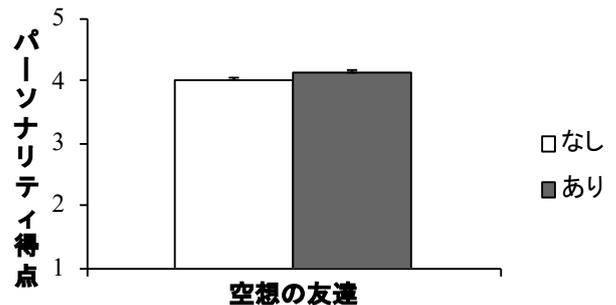
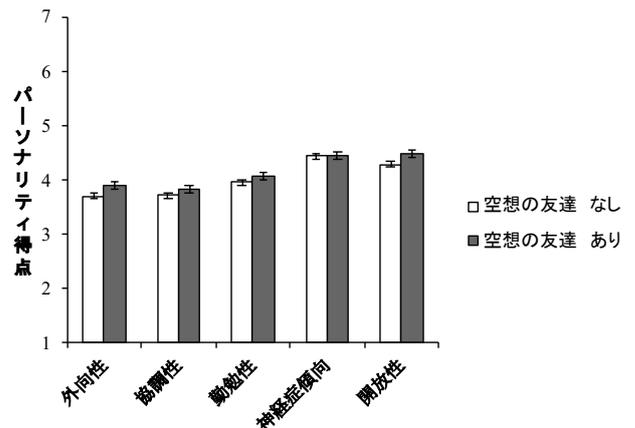


図4：パーソナリティーと空想の友達の有無 交互作用



3.3 社会的スキルについて

社会的スキル尺度(鈴木, 2010)の 22 項目について因子分析(最尤法、プロマックス回転)を行なった。その結果、Q18・Q21 の 2 項目について因子負荷量が.35 未満であったためこれらの項目を除外し、計 20 項目で再度因子分析を行った(因子分析表は付録参照)。結果 4 因子を検出し、信頼性係数 α は因子 1=.866、因子 2=.868、因子 3=.788、因子 4=.826 だった。先行研究を参考にそれぞれ「自己解決力」「コミュニケーション力」「仕事力」「主張性」と名付けた。

本研究では空想の友達を所有していた方が、社会的スキルが高いと仮説を立て、従属変数を「社会的スキル」独立変数を「空想

の友達の有無」とし混合要因分散分析を行なった。結果、空想の友達の有無の主効果は見られなかった ($F(1, 408) = 0.322, ns.$) (図5)。社会的スキルの主効果は有意差があった ($F(3, 1224) = 78.008, p = .001$) が、交互作用には有意差は見られなかった ($F(3, 1224) = 0.739, ns.$) (図6)。このため、空想の友達を持っている方が、社会的スキルが高いという仮説は支持されなかった。

では、現在も空想の友達を所有している者は、空想の友達との交流を社会人になった今も引き続き行っているため、実際の現実社会での交流にも影響を多く受けているのではないだろうか。以下は探索的分析として、独立変数を「過去に空想の友達を持っていた・現在も空想の友達を持っている・空想の友達はいない」の3パターンで混合要因分散分析を行なった。結果、空想の友達の有無(IC 所有を過去・現在で分類)の主効果は見られなかった ($F(2, 407) = 0.166, ns.$) (図7)。社会的スキルの主効果は有意差があった ($F(3, 1224) = 78.008, p < .001$) が、交互作用には有意差は見られなかった ($F(6, 1224) = 0.623, ns.$)。

図5: 社会的スキルと空想の友達の有無 分散分析

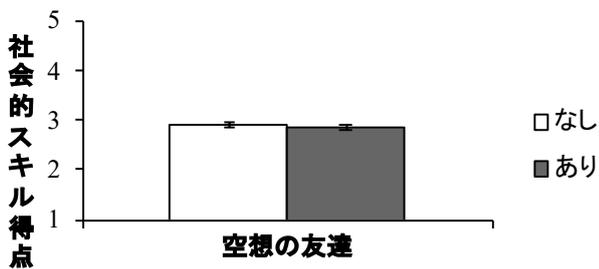


図6: 社会的スキルと空想の友達 交互作用

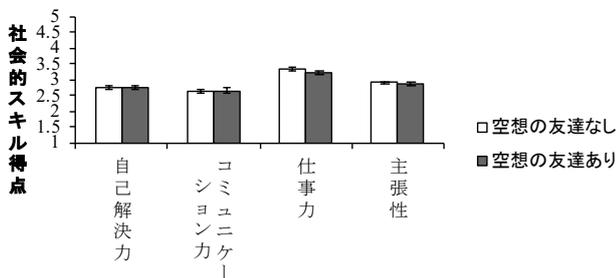
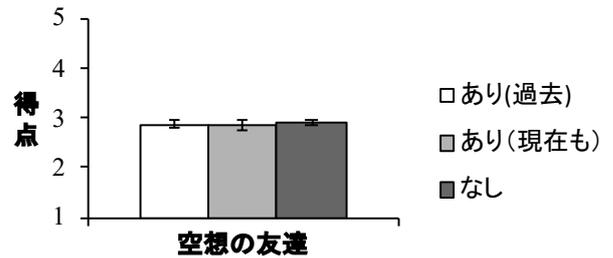


図7: 社会的スキルと空想の友達の有無 (IC所有を過去・現在で分類) 分散分析



3.4 利他行動尺度について

利他行動尺度(小田・大・丹羽ら, 2013)の21項目について因子分析(最尤法、プロマックス回転)を行なった。その結果、Q8・Q18の2項目について因子負荷量が.35未満であったためこれらの項目を除外し、計19項目で再度因子分析を行った(因子分析表は付録参照)。その結果、3因子が検出された。信頼性係数 α は因子1=.848、因子2=.845、因子3=.836で、先行研究を参考にそれぞれ「友人・知人項目群」「家族項目群」「他人項目群」と名付け、分析に用いた。

本研究は空想の友達POを所有していた方が最も利他性が低く、空想の友達IFを所有していた方が最も利他性が高いと仮説を設定した。従属変数を「利他性」独立変数を「空想の友達の種類(未所持を含む)」とし混合要因分散分析を行なった結果、空想の友達の種類(未所持を含む)の主効果は見られなかった ($F(2, 407) = 1.833, ns.$) (図8)。利他性の主効果は有意であった ($F(2, 814) = 741.915, p < .001$) が、交互作用に有意差は見られなかった ($F(4, 814) = 1.694, ns.$) (図9)。このため、仮説は支持されなかった。

図8: 利他行動と空想の友達の種類の分散分析

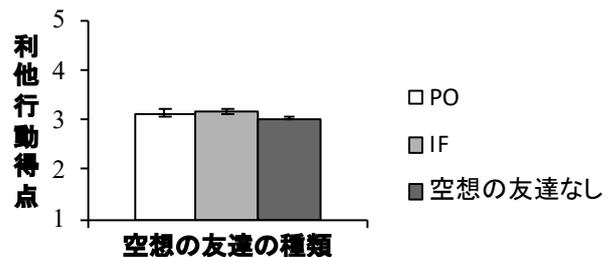
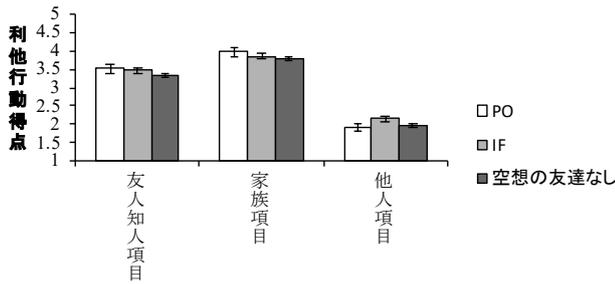


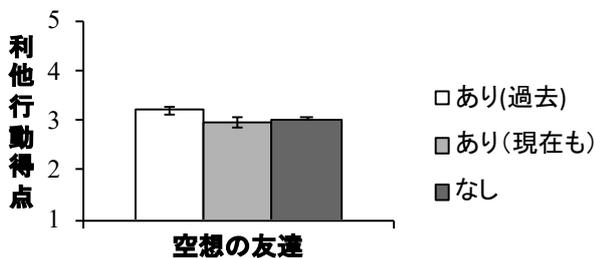
図9: 利他行動と空想の友達の種類
交互作用



では、現在も空想の友達を所有している者の利他性は違いがあるのだろうか。以下は、被験者データが少ないため検出力は低いが探索的分析として行なった。

従属変数を「利他性」独立変数を「空想の友達の有無(IC 所有を過去・現在で分類)」で混合要因分散分析を行なった。結果、空想の友達の有無(空想の友達所有を過去・現在で分類)の主効果に有意差があった ($F(2, 407) = 3.598, p = .028$) (図 10)。多重比較(Holm 法)の結果、過去空想の友達を所有していた者の方が空想の友達がいない人よりも利他行動得点が有意に高かった ($t(407) = 2.518, p_{adj} = .034$)。過去空想の友達を所有していた者と現在も空想の友達を所有している者 ($t(407) = 1.884, ns.$)、現在も空想の友達を所有している者と空想の友達を所有していない者 ($t(407) = -0.526, ns.$)との間には有意な差は見られなかった。一方で、利他性の主効果は有意であった ($F(2, 814) = 544.949, p < .001$) が、交互作用に有意差は見られなかった ($F(4, 814) = 0.307, ns.$)。

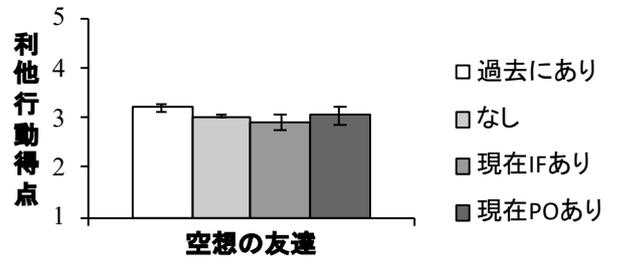
図10: 利他行動と空想の友達の有無(ic
所有を過去・現在で分類) 分散分析



また、現在も所有していると回答した29人を IF 所有17人、PO 所有12人に分け、空想の友達の所有を4分類し分析した。従属変数を「利他性」独立変数を「空想の友達の有無(現在所有を種類で分類)」で混合要因分散分析を行なった。結果、空想の友達の有無(現在所有を種類で分類)の主効果に有意差は見られなかった ($F(3, 406) = 2.505, p = .056$) (図 11)。利他性の主効果

は有意であった ($F(2, 812) = 294.946, p < .001$) が、交互作用に有意差は見られなかった ($F(6, 812) = 0.754, ns.$)。

図11: 利他行動と空想の友達(現在所有を種類で分類) 分散分析



3.5 認知的完結欲求について

認知的完結欲求尺度(鈴木・桜井, 2003)の20項目について因子分析(最尤法、プロマックス回転)を行った。その結果、3因子が検出された(因子分析表は付録参照)。信頼性係数 α はそれぞれ因子1=.889、因子2=.864、因子3=.779で、Q17の1項目のみが因子負荷量が.35未満であった。また、Q18のみが先行研究で示されていた「決断性」ではなく「予測可能性に対する選好」の因子になったが、決断性に対する因子不可量も-.387と十分な値であったため、本研究の分析では決断性に含めた。

本研究では空想の友達を所有していた方が、決断性が高いと仮説を立て、従属変数を「認知的完結欲求の3因子」独立変数を「空想の友達の有無」とし混合要因分散分析を行なった。結果、空想の友達の有無の主効果に有意差は見られなかった ($F(1, 408) = 1.449, ns.$) (図 12)。また、認知的完結欲求の主効果は有意であった ($F(2, 816) = 193.479, p < .001$) が、交互作用では有意差は見られなかった ($F(2, 816) = 1.115, ns.$) (図 13)。そのため、仮説は指示されなかった。

図12: 認知的完結欲求と空想の友達
分散分析

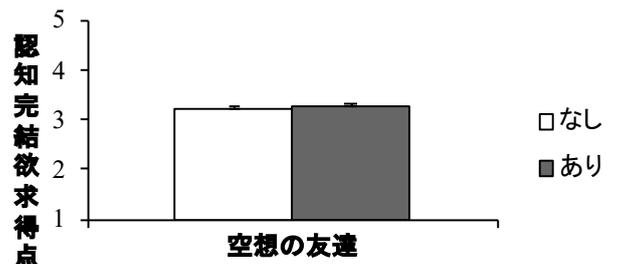
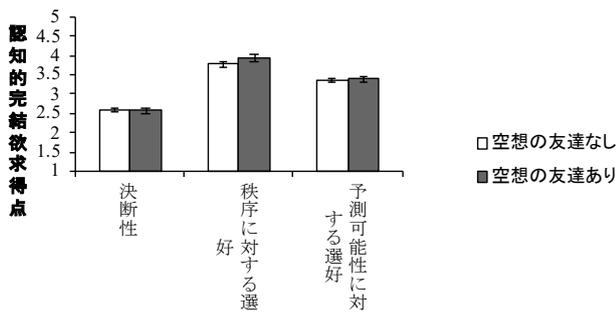


図13: 認知的完結欲求と空想の友達 交互作用



以下、認知的完結欲求尺度の空想の友達の有無別の平均と標準偏差を表4に示す。

	決断性	予想可能性に対する嗜好	秩序に対する嗜好
空想の友達なし			
平均	3.592	3.444	3.766
標準偏差	0.381	0.365	0.659
空想の友達あり			
平均	3.693	3.446	3.933
標準偏差	0.323	0.460	0.818

4. 考察

本研究では、成人410人を対象にしたWEBアンケート調査から、空想の友達の所有率や認知度、過去に空想の友達を所有していたことによる現在への影響を、パーソナリティ・社会的スキル・利他性・認知的完結欲求により検討した。

空想の友達の所有率は30.7%で、先行研究よりも少し高い結果になった。空想の友達の所有率や空想の友達の種類の内訳の考察については、研究1・研究2をまとめ、総合考察にて議論する。

社会的スキルについて、空想の友達を過去に所有していたことによる有意な差は見られなかった。これは、子どもにとっての空想の友達の存在は、実際の社会生活での人との関わりとは違う次元のことである、と捉えることができるように思われる。空想の友達を所有する子どもたちは、その空想の友達が自分だけの存在で、実在していないことは理解しているため(McLewin & Muller, 2006)、実社会でのコミュニケーションとは切り離して相互作用を行なっている可能性がある。探索的分析で、独立変数を「過去に空想の友達を持っていた・現在も空想の友達を持っている・空想の友達は無い」の3条件、従属変数を「社会的スキル」で混合要因分散分析を行なったが、これについても有意差は見られなかった。所有していた年齢に関係なく、空想の友達との交流と、大人になった後の社会的な交流とは切り離して行なっていると考えられる。

過去に所有した空想の友達の種類と利他性の関係についても、有意な差は見られなかった。Yamaguchi & Moriguchi (2020)の研究は、対象は4~6歳の子どもであり、自分の取り分を考えるステッカータスクにおいて、一人で行う時や大人が周りにいる時よりも、POが存在している状況の方が利己的な行動の傾向が確認された、というものであった。本研究は空想の友達がその場に存在していると仮定した状況のものではなく、実社会に存在する他者を対象にした、個人の行動に対する質問だったため、差が現れなかった可能性がある。また幼少期はPOがその場に存在したことにより、会話などによるコミュニケーションの結果、利己的な行動が促進された可能性があるが、成長過程でPOは消失し、身の回りの社会との関わりの中で突出した利己的な傾向は無くなっていった可能性も考えられる。また、自由記述欄に基づく分析ではあるが、本研究ではPOを保持していた年齢がIFを保持していた年齢よりも早い傾向が見られた。POを保持していた年齢時はまだ他者への思いやりなどを涵養している時期であったため、POを消失した以降で個人の利己性、利他性などが備わった可能性も考えられる。

また、探索的分析として独立変数を「空想の友達の有無(空想の友達所有を過去・現在で分類)」で混合要因分散分析を行なった結果、空想の友達の有無(空想の友達所有を過去・現在で分類)の主効果に有意差が見られた。つまり、継続して持ち続けないうが過去に空想の友達を持っていた者が、空想の友達を所有したことがない者よりも利他的であることが示された。エピソードの回答欄では、幼い頃の空想の友達は一人で寂しい時や話を聞いて欲しい時にそばにいてくれたというものが多かったが、その友達が成長過程で消失しているということは、現実でも話を聞いてくれ、そばにいてくれる存在ができたからだという可能性も考えられる。空想の友達を過去持っていた者は、そういった他人からの優しさや愛情をより多く実感しているため、利他的であるという可能性が考えられる。

また、有意差は見られなかったが、若干であるが現在もIFをもち続ける者が、最も利他行動得点が低かったという結果は興味深い。Piazza et al. (2011)はIFがその場に存在すると仮定された状況下では子どもが不正行為を行う可能性が低く、IFの存在が子どもたちの利己的な行動を抑制している可能性を示唆している。IFは持ち続けていく過程で、IF自身の性格や所有者に与える影響が変化していく可能性も考えられる。今後の研究で質問項

目を改めて精査し、データ数を増やすなどして再度検討する必要があると考える。

認知的完結欲求の決断性因子に関して、空想の友達の有無での有意差は見られなかった。鈴木 (2010) では決断性が高い人ほど他者と積極的に関わっていくことが示されているが、空想の友達を所有していたことで、空想の友達と相互作用を行っていた経験は、成人後の他者との関わりに影響を与えないことがわかった。

総合考察

二つの研究のアンケート調査において、日本における空想の友達の所有率や認知率、また空想の友達を所有していたことによる成人後の個人差の影響について検討した。

空想の友達の所有率については、研究1が被験者全体の 22%、研究2が被験者全体の 30.7%という結果だった。これは先行研究の麻生 (1991) の 17.2%よりも高い数値であるが、結果が異なった理由としては 2 つの要因が考えられる。1 つは、この麻生 (1991) では空想の友達を IF に限定して分析を行なっていることである。また、回答形式もエピソード記入の自由記述欄のみで、空想の友達が存在したかを 2 択で回答させたものではない。本研究1・2では設問時に空想の友達の定義を IF・PO で分け、文章で明示した。これにより、ぬいぐるみを対象としたものも空想の友達と認識できるパターンが増え、所有率が増えた可能性がある。

2つ目は、各研究でのサンプルの違いである。麻生(1991)と研究1の対象は共に大学生であった。空想の友達を所有するに至った理由は様々であるが、仮に空想の友達の存在が、空想の友達所有時点での家庭での寂しさや愛情を補うものであったとするならば、一般的に大学に進学できる程度 of 家庭収入や学力があるとする大学生は、家庭環境には恵まれた対象であったと考えられる。一方で、本研究2では Web でのアンケート調査を行ったため、学歴や年齢の統制はされていない。幼少期・学童期の家庭環境の違いが結果につながった可能性もある。また、麻生 (1991) が実施した 1991 年頃は日本での空想の友達研究はまだ少なく、一般にも「空想の友達」というものは児童書内にあるフィクション(例えば、赤毛のアンやとなりのトトロ)の出来事でしか知られていなかった。しかし、現在は一般に周知されたものではないが、空想の友達を所有していなかったものの 4 割が空想の友達の存在を知っていたと回答する程度に認知は広がってきている。そういった、時代背

景も空想の友達所有率の違いに関係していると考ええる。

しかし一方で、Moriguchi & Todo (2018) では、子どもの半数以上が空想の友達を所持していると述べている。本研究は被験者に過去の経験を回顧させる形で行ったアンケート調査だったが、子どもの頃よりも減少するといった結果になった。これは、McAnally, Forsyth, & Taylor, Reese (2020) が 5 歳半の時点で所有していた空想の友達のことを 16 歳の時には 8 割の学生が忘れていたと示したように、本研究の被験者も成長過程で空想の友達が消滅し、幼児期健忘により空想の友達を持っていた記憶も忘れてしまったからだと考えられる。

空想の友達の種類については、研究1が IF・PO が同数、研究2が IF:63.5%、PO:36.5%という結果だった。研究1・研究2共に日本の子どもたちは IF よりも PO を持つ傾向の方が高い (Moriguchi & Shinohara, 2012) という先行研究とは、異なる結果となった。これは子どもの研究では半分の子どもが空想の友達を持っていると回答したのに対し、今回のアンケート調査のように成人に過去を回顧してもらう形での調査の結果では 20%ほど減少していることに起因すると考えられる。空想の友達は成長過程で消失し、空想の友達の存在自体を忘れてしまう可能性が高い。今回の結果を考察すると、IF よりも PO の方が忘れられる可能性が高いと考えられる。IF は、言わば自らが姿も形も作り出した唯一無二の友達であり、また、IF は PO よりも本人と対等な関係の友人になることが多い (Gleason, Sebanc, & Hartup, 2000)、より本当の友達のように心に残りやすいのではないだろうか。また、空想の友達所有年齢の最頻値は IF が10歳に対し PO が5歳という結果となり、幼い頃に消失しているケースも多かった。そのため、IF より PO の所有率の方が高かった場合であっても、成人後の調査時には忘れてしまい、結果 IF の所有率の方が高くなった可能性がある。本研究に残された課題としては、研究2で IF と PO の両方所有していた者を測定する項目を含めていなかったことが挙げられる。研究1では回答者の一人が IF・PO 両方を所有していたため、今後の研究では両方所有の可能性を考慮し質問紙を作成されたい。

空想の友達を所有していたことによる成人後の個人差の影響について、社会的スキルなどの対人関係を円滑に進めるものには影響がないことが示された。これは、空想の友達を所有する者にとって空想の友達とのコミュニケーションと現実での対人とのコミュニケーションは関連せず、別の次元のものと考えている可能性がある。今後は空想の友達を持っていたものに対して、空想の友達と現実の友達とでの実際に見せている自分や接する上での意識の

違いに言及した質問を加えることで、検討できると考える。

また、利他性について、空想の友達の種類での有意な差は見られなかった。しかし、現在も空想の友達を所有している人、過去空想の友達を所有していた人、空想の友達がいない人を区別し検討した結果、過去空想の友達を所有していた者の方が空想の友達がいない人よりも利他行動得点が有意に高いことがわかった。空想の友達を過去所有していたが成長過程で消失した者は、現実で求めている他人からの優しさや愛情を実感できるようになったことで、より利他的になった可能性がある。これは、空想の友達が消失した原因を含め検討を行う必要があると考える。

今後はこれらの問題点を修正した上で、成人後の影響について考察を重ね、加える尺度を再検討の末、空想の友達を所有していたことによる成人後の個人差の影響をさらに明らかにしていく必要があるだろう。

謝辞

本論文を作成するにあたり、ご指導を頂いた三船恒裕准教授に心より感謝致します。また、日常の議論を通じて多くの知識や示唆を頂戴致しました皆様に深く感謝致します。

参考文献

麻生武(1989). 想像の遊び友達-その多様性と現実性-, *相愛女子短期大学研究論集*, 34, 87-135.

麻生武(1996). 「ファンタジーと現実」, 金子書房.

Bouldin, P., Bavin, E. L., & Pratt, C. (2002). An investigation of the verbal abilities of children with imaginary companions. *First Language*, 22(3), 249-264.

Davis, P. E., Meins, E., & Fernyhough, C. (2011). Self-knowledge in childhood: Relations with children's imaginary companions and understanding of mind. *British Journal of Developmental Psychology*, 29(3), 680-686.

Giménez-Dasí, M., Pons, F., & Bender, P. K. (2014). Imaginary companions, theory of mind and emotion understanding in young children. *European Early Childhood Education Research Journal*, 1-12.

Gleason, T. R., Sebanc, A. M., & Hartup, W. W. (2000). Imaginary companions of preschool children. *Developmental Psychology*, 36(4), 419-428.

Kruglanski, A. W., & Webster, D. M., (1996). Motivated closing of the mind: "Seizing" and "freezing." *Psychological Review*, 103,263-283.

菊池章夫 (1988). 思いやりを科学する 川島書店

町田佳世子 (2007). コミュニケーション遂行能力とストレスフルなコミュニケーション課題対処能力の関連. *北海道東海大学高等教育研究* 第2号:29-36, 2007.

Mcanally, H. M., Forsyth, B. J., & Taylor, M., Reese, E. (2020). Imaginary Companions in Childhood: What Can Prospective Longitudinal Research Tell Us About Their Fate by Adolescence? *Journal of Creative Behavior*, Vol. 0, Iss. 0, pp. 1-8.

McLewin, L. A., & Muller, R. T. (2006). Childhood trauma, imaginary companions, and the development of pathological dissociation. *Aggression and Violent Behavior*, 11(5), 531-545.

森口佑介 (2014). 空想の友達—子どもの特徴と生成メカニズム—, *心理学評論*, 第57巻,第4号,529-539.

森口佑介 (2015). おさなごころを科学する 進化する乳幼児観, 新曜社.

森口佑介 (2016). 発達科学が発達科学であるために——発達研究における再現性と頑健性——, *心理学評論*, 第59巻, 第1号, 30-38.

Moriguchi, Y., & Shinohara, I. (2012). My neighbor : Children's perception of agency in interaction with an imaginary agent. *PLoS One*, 7(9), e44463.

Moriguchi, Y., & Todo, N. (2018). Prevalence of imaginary companions in children: A meta-analysis. *Merrill-Palmer Quarterly*, 64(4), 459-482.

Moriguchi, Y., & Todo, N. (2019). Prevalence of imaginary companions in Japanese children. *International Journal of Psychology*, 54(2), 269-276.

Motoshima, Y., Shinohara, I., Todo, N., & Moriguchi, Y. (2014). Parental behaviour and children's creation of imaginary companions: A longitudinal study. *European Journal of Developmental Psychology*, 11 (6), 716-727.

小田 亮・大めぐみ・丹羽雄輝・五百部裕・清成透子・武 田美亜・平石界 (2013). 対象別利他行動尺度の作成と妥当性・信頼性の検討, *心理学研究*, 84, 28-36.

小塩真司, 阿部晋吾, カトローニピノ (2012). 日本語版 Ten It

- m Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み. *パーソナリティ研究*, 21, 40-52.
- Piazza, J., Bering, J. M., & Ingram, G. (2011). Princess Alice is watching you: Children's belief in an invisible person inhibits cheating. *Journal of Experimental Child Psychology*, 109(3), 311-320.
- 清水裕士 (2016). フリーの統計ソフト HAD:機能の紹介と 統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 *メディア・情報・コミュニケーション研究*, 1, 59-73.
- Singer, D. G., & Singer, J. L. (1990). *The house of make-believe: Children's play and the developing imagination*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 鈴木公基・桜井茂男 (2003). 認知的完結欲求尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 *心理学研究*, 74, 270-275.
- 鈴木公基・桜井茂男 (2001). 認知的完結欲求:情報処理量および対人関係性からの検討, *筑波大学心理学研究*, 23, 153-160.
- 鈴木公基 (2010). 認知的完結欲求と対人積極性—消極性との関連 —シャイネスおよび社会的スキルとの関連— *人間環境学会『紀要』* 第 13 号.
- Svendsen, M. (1934). Children's imaginary companions. *Archives of Neurology and Psychiatry*, 32, 985-999.
- Singer, D. G., & Singer, J. L. (1990). *The house of make-believe: Children's play and the developing imagination*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Tahiroglu, D., Mannering, A. M., & Taylor, M. (2011). Visual and auditory imagery associated with children's imaginary companions. *Imagination, Cognition and Personality*, 31(1), 99-112.
- Taylor, M. (1999). *Imaginary companions and the children who create them*. New York, NY: Oxford University Press.
- Taylor, M., Sachet, A. B., Maring, B. L., & Mannering, A. M. (2013). The assessment of elaborated role-play in young children: Invisible friends, personified objects, and pretend identities. *Social Development*, 22(1), 75-93.
- Taylor, M., Hulette, A. C., & Dishion, T. J. (2010). Longitudinal outcomes of young high-risk adolescents with imaginary companions. *Developmental Psychology*, 46(6), 1632-1636.
- Taylor, M., & Mannering, A.M. (2006). Of Hobbes and Harvey: The imaginary companions created by children and adults. In A. Goencu & S. Gaskins (Eds.), *Play and development: Evolutionary, sociocultural, and functional perspectives* (pp. 227-245). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates Publishers.
- 富田昌平 (2002). 子どもの空想の友達に関する文献展望, *山口芸術短期大学研究紀要*, 34, 19-36.
- 富田昌平・高尾昌代 (2014). 児童期に空想の友達を持つ子どもの特徴, *心理科学*, 第 35 卷, 第 1 号, 52-62.
- Trionfi, G., & Reese, E. (2009). A good story : Children with imaginary companions create richer narratives. *Child Development*, 80(4), 1301-1313.
- Yamaguchi, M., & Moriguchi, Y. (in press). Children demonstrate selfishness in the presence of their Personified Objects. *Imagination, Cognition and Personality: Consciousness in Theory, Research, and Clinical Practice*.